

現代語・現代文化学系研究会発表要旨

月例会 (2003年6月25日)

動詞句代用に関わる現象の言語間比較

島田雅晴

本発表は既出動詞句の繰り返し表現を生成統語論にもとづき分析し、ヒトの言語の普遍的性質の研究に資することを目的としたものである。既出動詞句の繰り返し表現には数種類ある。いくつか例をあげる。

- (1) a. John said that he would win the race, and I think that he would win the race.
 b. John said that he would win the race, and I think that he would.
- (2) a. John promised that he will finish the assignment, and finish the assignment he will.
 b. John will finish the assignment, and so will Mary.

(1a)の第2等位接続要素内では、第1等位接続要素内の動詞句 win the race がそのまま繰り返されている。しかし、(1b)の第2等位接続要素内では動詞句 win the race は省略されている。また、(2a)では第2等位接続要素内で動詞句 finish the assignment は前置され、(2b)では so により代用されている。一般に(1b)、(2a)、(2b)の操作はそれぞれ動詞句削除、動詞句前置、動詞句代用と呼ばれている。

本発表で特に議論するのは do が用いられている動詞句削除と動詞句代用である。それぞれの例を(3)と(4)に列記する。

- (3) John left and Nancy did, too.
 (4) John left and Nancy did so, too.

これらを考察することに意義があるのは虚辞の分析に関わっているからである。動詞句代用では非行為動詞句は代用できないが、動詞句削除にはそのような意味的制約はないということであった。それは、後者の do は次のような疑問文や否定文で do 支持という操作で生起する虚辞の do であることを意味しているのである。

- (5) a. John did not buy anything.

b. What did John buy?

生成統語論においては初期の理論から今日の極小理論 (Minimalist Program) にいたるまでの局面においてもいわゆる虚辞要素に関わることは多く議論されてきた。虚辞要素の代表的なものは英語でいえば、意味のない虚辞の *it* とよばれるものや存在をあらわす *there* 構文の *there* である。虚辞要素が意味内容をもたないものだとすればその生起は形式的な文法の要請によるものだといえる。それはこれまで格理論 (Case Theory) や拡大投射原理 (Extended Projection Principle (EPP))、つまり、最近の用語でいえば、素性というものにもとめられてきた。格理論や EPP、素性は普遍文法を構成する要素の候補であり、したがって、虚辞の研究は普遍文法の研究に資するものとして重要視されてきたのである。そして、そのような虚辞は名詞に限らず動詞にも、現代英語に限らずそのほかの言語にも、存在する、というのが本発表の観察であり、そのことは普遍文法の存在を強く示唆するという理論的に重要な意味合いを持つのである。

現代英語のほかに *do* 支持が観察されると結論付けられる印欧語というのは、例えば、古英語である。これまでは疑問文や否定文で(5)のように *do* が用いられることがないことから古英語では *do* 支持がないと考えられるのが一般的であった。しかし、本発表では古英語で非行為動詞句を *do* の生起する動詞句削除構文で受けることが可能である例が存在することから、古英語にも虚辞の *do* があったものとするのである。また、*do* とは形態的、統語的に一見何の関係もなさそうな日本語の述語を形成する「だ」も虚辞に相当する語であることが指摘される。例えば、次の例にある「だ」である。

(6) 太郎が本を買った。花子もだ。

本発表では(6)の「花子もだ」という構文が英語の動詞句削除構文が持っている性質をもっていることから、これも削除構文の一種であると結論付ける。

「だ」も *do* 支持で生起している *do* と同様、虚辞を生起させる仕組みによりあらわれている虚辞要素と分析するのである。また、「柔軟だ」のような形容動詞や「長身だ」のような名詞述語に生起する「だ」も虚辞であると主張される。

系統が異なる言語間で形態が異なった要素が異なった構文において同一の虚辞という機能を果たしているという大変興味ある現象があることがわかる。そして、このことはヒトの言語の仕組みの中に普遍文法というものが存在していることを強く示唆するものなのである。